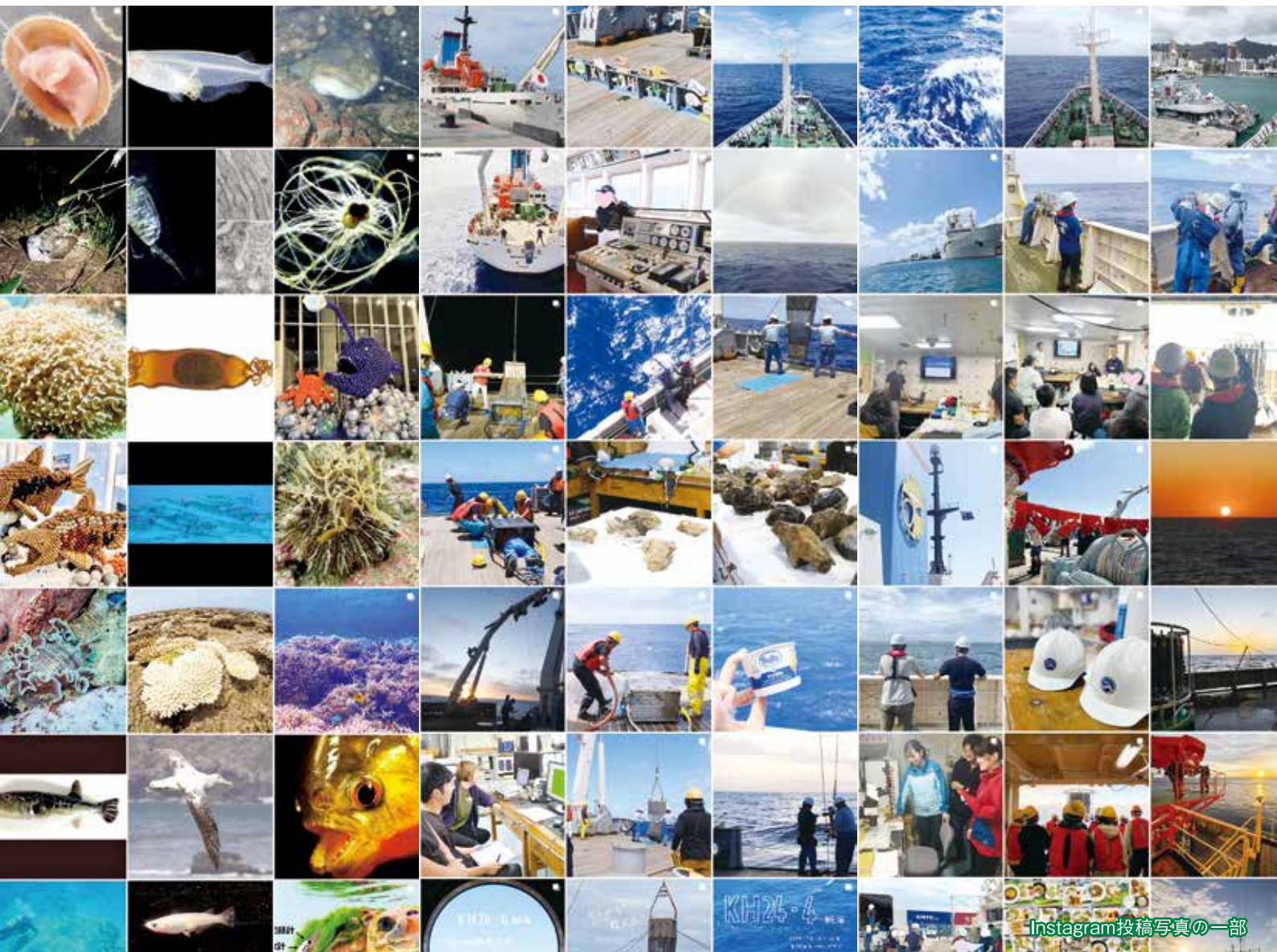


Ocean Breeze

オーシャンブリーズ



Instagram投稿写真の一部

特集 大気海洋研究所のSNS紹介

令和5年度 退職教員 特別寄稿	平松一彦	准教授	報告	第16回 東京大学 大気海洋研究所 博士論文公開発表会
	山崎俊嗣	教授		植松光夫名誉教授がThe Oceanography Society Fellowに選出されました
	永田 俊	教授		ベルゲン大学数学自然科学部と国際交流協定を締結
	道田 豊	教授		金沢大学環日本海域環境研究センターと部局間交流協定を締結しました
	高薮 縁	教授		安田一郎教授、渡部雅浩教授が令和6年度「科学技術分野の文部科学大臣表彰」で顕彰されました
	津田 敦	教授		杉本隆成名誉教授が瑞宝中綬章を受章
				ハワイ大学マノア校との全学協定締結
				高薮 縁名誉教授が「第17回海洋立国推進功労者表彰」(内閣総理大臣賞)を受賞

研究人生よもやま話③ | モラトリウム期間

著者による新刊紹介

空と海の文学 第14回 | 日本沈没

イベントレポート

貝輪の考古学 日本列島先史時代におけるオオツタノハ製貝輪の研究

日本のウナギ 生態・文化・保全と図鑑

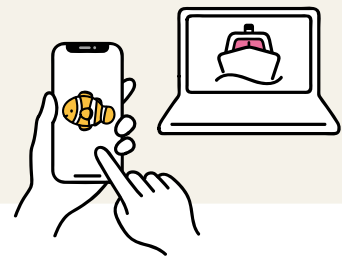
気候変動と社会—基礎から学ぶ地球温暖化問題

本当に感動する サイエンス超入門! 空のふしぎを解き明かす 天気はなぜ変わるのか

受賞／人事異動一覧

大気海洋研究所のSNS紹介

大気海洋研究所では、InstagramやFacebook、X(旧Twitter)で、所の研究成果や研究生活について発信しています。
この特集ではおもに2つのInstagramをご紹介します。
ぜひ各SNSをフォローして、大海研の日常をのぞいてみてください。



Instagram

東京大学大気海洋研究所 「大海研生きもの図鑑」

(@fish_dictionary_aori)

https://www.instagram.com/fish_dictionary_aori/

フォロワー：375人(2025年2月25日現在)

初投稿日：2023年9月21日

所内から募った、研究航海やフィールド調査で撮った生きもの写真に加え、プレスリリースに登場した生物、研究者自身による研究対象生物の紹介を掲載しています。



Instagram「大海研生きもの図鑑」投稿写真の一部

ビュー数ベスト5



BEST
1

【バルーン生きものシリーズ2・深海魚】
「見においで!」Come and see!
(左:メンダコ 右:チョウチンアンコウ)

【バルーン生きものシリーズ1・サケ】
「もうすぐ一般公開!」



BEST
2



BEST
3

【プレスリリース】2023年10月18日
サンゴと褐虫藻の共生に関わる
遺伝子候補を特定
—サンゴ礁生態系を支える共生分子機構の全容に迫る—



BEST
5



BEST
4

「棘が長すぎる浮遊性有孔虫」
(ヒラウキダマ)

「鳥の楽園にお邪魔しました」(オオミズナギドリ)

東京大学大気海洋研究所

大気海洋研究拠点「研究航海日誌」

(@research_shiplog)

https://www.instagram.com/research_shiplog/

フォロワー：588人(2025年2月25日現在)

初投稿日：2023年10月19日

大海研では研究船共同利用を推進しており、
おもな研究船である「白鳳丸」「新青丸」「よこすか」
での研究航海の様子を発信しています。



2025年1月31日までに掲載した航海は23航海に及びます。
下記ページ掲載の「研究船運航計画」「航海報告書」と
照らし合わせてご覧になると、より臨場感が味わえます。

大気海洋研究所 共同利用・共同研究推進センター
共同利用・共同研究推進室 観測研究推進グループ

<https://ccrp.aori.u-tokyo.ac.jp/kikaku/index.html>

Instagram「研究航海日誌」で紹介した研究航海
(2025年1月31日現在)

「白鳳丸」 航海名	「新青丸」 航海名	「よこすか」 航海名
KH-23-6	KS-24-4	YK24-05S
KH-23-7	KS-24-6	YK24-09S
KH-23-9	KS-24-9	YK24-10S
KH-23-10	KS-24-10	
KH-23-11	KS-24-11	
KH-24-E1	KS-24-12	
KH-24-1	KS-24-14	
KH-24-2	KS-24-15	
KH-24-3	KS-24-17	
KH-24-4	KS-24-19	



初投稿！

「研究航海日誌」
初投稿
(2023年10月19日)



Instagram「研究航海日誌」投稿写真の一部

Facebook

「東京大学大気海洋研究所」
(日本語版)

<https://www.facebook.com/UTokyo.aori>

フォロワー：1,871人(2025年2月25日現在)

初投稿日：2011年6月22日



Facebook

「Atmosphere and
Ocean Research Institute,
the University of Tokyo」(英語版)

<https://www.facebook.com/UTokyo.aori.en/>

フォロワー：682人(2025年2月25日現在)

初投稿日：2011年6月22日



X

X (@UTokyo_AORI)

https://x.com/UTokyo_AORI

フォロワー：527人(2025年2月25日現在)

初投稿日：2022年10月3日



海洋生命システム研究系 海洋生物資源部門 准教授 平松 一彦

定年退職後も活躍される方が多いですが、私は完全に引退することとしました。コロナ禍以降主に在宅勤務であったため、書斎でのパソコンに向かっての仕事が読書やビデオ鑑賞に、大海研への遠距離通勤が時々の日帰りや一泊の旅行になっただけで、生活パターン自体はあまり変わっていません。今の所、締め切りもノルマもない(唯一の例外が本稿の執筆)「隠遁」と「沈黙」の静かな生活をそれなりに楽しんでいます。

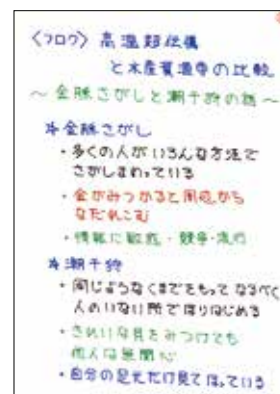
1984年に物理学専攻の修士課程を終えて水産庁遠洋水産研究所に入庁して以来、40年間の社会人・研究者生活でした。遠洋水産研究所では当初は水色リモートセンシングにかかわりましたが、周囲からの影響もありその後は水産資源の研究が主となりました。就職当初は全くの畑違いということで戸惑うことばかりでしたが(写真は最終講義で触れた「金脈探しと潮干狩りの話」のオリジナルOHP)、一方で他の方にはない知識や発想も可能であることは強みにもなりまし

た。水産研究所では遠洋漁業に関する資源評価に関わりました。しかし会議対応が主でなかなか落ち着いて研究できないことや、国内の資源評価とのギャップが気になり大学への転出を考えるようになり、2005年4月に当時の海洋研究所の資源解析分野に着任しました。

(大気)海洋研では国内の水産資源の評価や管理に関わることになり、定年まで続けました。国内の資源評価だけでも20年近く関わったことになりますが、とにかく毎年毎年新たな問題が生じ、その原因の究明や対策に頭をひねることとなりマンネリに陥るようなことはありませんでした。特にここ数年は、漁業法の改正に伴う資源評価・管理方法の変更が行われたため、数多くの会議が開催されました。定年も近かったため最後の御奉公のつもりで依頼のあったものは全てお引き受けして対応しました。

それにしても40年前、希望と不安とともにいかにも場違いな水産研究所に就職した時

には、大学の研究所で最終講義を行い定年退職の日を迎えることになろうとは思っていませんでした。最終講義では水産資源の研究には想定外のことが多いという話をしましたが、これが私にとっての最大のそしてありがたい想定外でした。これまで関わりを持っていただいた方々に改めて感謝致します。ありがとうございました。



「金脈探しと潮干狩りの話」の1987年発表時のOHP。当時は手書きである。最終講義では印刷原稿に準拠したため多少言い回しが異なっている。

平松 一彦 准教授 最終講義



最終講義の様子

平松一彦先生の最終講義「水産資源の評価と管理に関わって」が2024年3月25日に大気海洋研究所講堂にて行われました。最終講義では、学生時代に学んだ理論物理の複雑系の分野から水産の分野に飛び込んだ経緯から、就職先の水産庁遠洋水産研究所(現:国立研究開発法人水産研究・教育機構)で初めは戸惑いながらも独学で水産資源学や統計学の勉強をされたこと、マグロ類の国際資源の評価に携わられてきたなかで印象的だった出来事など、苦労されたエピソードを交えつつ紹介してくださいました。2005年に東京大学海洋研究所(当時)に着任されてからは、水産資源評価に外部有識者として活躍されるとともに、最尤法をベースとした水産資源学の再構築、混乱していた

コホート解析の手法の整理、オペレーティングモデルを用いた管理戦略の評価の提案などに取り組み、水産資源学の発展に多大な貢献をされました。一貫して水産資源の評価と管理に尽力されてきた平松先生の誠実なお人柄がよくわかる講義で、将来予測の困難な水産資源の評価に関わる研究者の未来にエールも送ってくださいました。平松先生の今後益々のご健勝とご多幸をお祈りいたします。(海洋生物資源部門 森田 健太郎)

▼平松 一彦 准教授
最終講義「水産資源の評価と管理に関わって」
<https://youtu.be/ZYuOtK9bDOg>



海洋地球システム研究系 海洋底科学部門 教授 山崎 俊嗣

私はsea-going scientistとして、退職までに58航海に参加し計約1600日を洋上で過ごしました。これは、大学を卒業して就職した地質調査所(当時)で、たまたま海洋地質部に配属されたことがきっかけでしたが、幸い自分には向いていたのだと思います。様々な専門の方々と共に乗船し、協力して調査を行うことにやりがいを感じてきました。今それぞれの航海を懐かしく思い出します。もちろん、楽しいことばかりではなく、一ヶ月近く乗船していても時化ばかりで、予定していた場所にはほとんど行くことすらできなかったという経験もしました。伊豆・マリアナ海域のように何度も調査を行った海域ですと、何の目印もない海の上にも海底地形図が思い浮かんで、この辺にはこんな形の高まりがあつて...というように土地勘のようなものを感じるようにもなりました。

調査船上でサンプルが取れる瞬間に立ち会うのが、最も緊張、興奮、感動を味わう時でした。船上に採泥器を引き揚げてすぐに、

狙ったようなサンプルが上手く取れたかどうかがわかります。「やった」もあれば「あーあ」もありました。乗組員の方々もいっしょに一喜一憂してくださいました。大漁が最大の喜びであろう漁船出身の乗組員に、柱状採泥器が海底を離れた時「もう一回海底に突き刺せば泥がもっと沢山取れる」と言われ、それでは量が多くてもサンプルとしての価値はなくなることを説明して納得していただいたというようなこともありました。取ったサンプルを陸上の実験室に持ち帰って行う様々な測定・分析は、単調で長時間かかる忍耐を要する作業の場合も多いのですが、船上で採取した時の感動が単純作業を後押ししてくれるように思いました。

私は2017年より国連大陸棚限界委員会委員を拝命し、もうしばらくこの仕事を続ける予定です。大陸棚延伸を申請する国の地形・

地質条件は様々で、審査には海洋地質学の知見が総動員されます。私の研究は、特定の地質現象が対象というよりは、グローバルに試料を採取することが重要であったため、結果として海底拡大系、沈み込み帯、遠洋域の別なく調査を経験することができました。さらに、一緒に乗船した多くの異なる専門の方々から門前の小僧の私に色々教えて下さったことが、この仕事に大変役立っています。皆様ありがとうございました。



海洋調査船上でのピストン・コア投入作業

山崎 俊嗣 教授 最終講義



最終講義の様子

山崎俊嗣先生の最終講義「海洋底の磁石」が、2024年3月25日午後には大気海洋研究所講堂で行われました。当日は、研究室の卒業生や共同研究者など、先生ゆかりの方々が数多く聴講にいられました。講義は、これまでの経歴にそって思い出のある研究と印象に残った出来事を振り返る内容でした。山崎先生の専門分野は、古地磁気学・海洋地質学であり、これまで一貫して、地磁気を対象もしくは手法として多様な基礎研究を行って来られました。例えば、海洋での磁気異常観測に基づく海山の磁化やテクトニクス、海底堆積物を用いた古地磁気強度の復元や逆転現象、ホットスポットの運動とマントルダイナミクス研究など、幅広い研究に長年にわたって取り組み、国際的に卓越した研究成果を挙げられました。国内外の学会活動でも活躍さ

れ、地球電磁気・地球惑星圏学会の会長を務められたほか、日本地球掘削科学コンソーシアムIODP部会会長を歴任されました。さらに、これまでの地球科学の専門知識を生かし、外務省参与として国連大陸棚限界委員会委員を現在2期目、務めています。ご退職後も、同委員会委員として、国連海洋法条約に基づき、沿岸国の大陸棚限界設定に寄与されることと思います。山崎先生の今後の益々のご活躍とご発展をお祈りいたします。(海洋底科学部門 朴 進午)

▼山崎 俊嗣 教授 最終講義「海洋底の磁石」
<https://youtu.be/tyRNXSQSW0U>



海洋地球システム研究系 海洋化学部門 教授 永田 俊

33年間の大学教員生活であった。縁あって、名古屋大学(水圏科学研究所、のちに大気水圏科学研究所)、京都大学(生態学研究センター)、東京大学(海洋研究所、大気海洋研究所)という学風の異なる大学を渡り歩いたが、その間、様々な人と出会い、陸水学、海洋学、生態学、生物地球化学といった分野の研究に取り組んだ。環境や生態系に関わる境界領域(分野横断型)のプロジェクト研究を通して、自分にとっては未知の分野にまで足を踏み込みながら(もちろん共同研究者の力を借りながら)、知的なフロンティアを切り開くという、スリリングで得難い体験ができた。また、学会発表や共同研究のために、世界各地を旅して歩いたのも楽しい思い出である。実際、論文や研究活動を通じて世界中に多くの知己や友人を得られたのは(そして、時として「あなたの論文に大変刺激を受けました」と言ってもらえ

たのは)、科学者であることの大きな喜びの一つであった。恩師、共同研究者、学生の皆さんをはじめ、支えてくれた多くの皆様に感謝したい。

東京大学には、助教授、教授として延べ21年間お世話になった。海洋研究所が中野区から柏キャンパスに移転し、大気海洋研究所に改組されたのが2010年だから、早いものでそれからもう14年が経過した。船舶による海洋観測を得意とする海洋研究所と、数値計算モデリングの拠点である気候システム研究センターを統合し、そのシナジーを最大限に発揮するための新しい組織を作ろうという意気込みで、連日、夜遅くまで熱のこもった議論をしていた頃がなつかしく思い出される。その当時は若手・中堅であった教員が、今では大型プロジェクトの指導者として、総合的な研究を推進しているのを見ると、統合が着実に実を結んでいる

ことが実感できて、とてもうれしく思う。これから気候変動や生物多様性の研究がますます重要になってくる中で、大気海洋研究所に対する社会の期待もさらに膨らむに違いない。独創的で上質な研究成果を生み出す、自由闊達な研究の場として、大気海洋研究所がこれからも発展していくことを祈っている。



アメリカでの修行時代(1989年)

永田 俊 教授 最終講義



最終講義の様子

永田俊先生の最終講義「海の水質循環と微生物過程」が、2024年3月26日に大気海洋研究所講堂にて行われ、先生ゆかりの研究者が多く参加されました。先生は、学位を取得後、米国デラウェア大学の研究員をはじめに、名古屋大学、京都大学、東京大学で教職を歴任され、この間、一貫して微生物生態学、生物地球化学のご研究と教育活動に邁進され、多大なご業績と後進の育成に貢献されました。当初、最終講義では、これら先生の秀逸なご研究のご紹介を予想しておりましたが、その予想は良い意味で裏切られ、先生の学生時代のお話から始まり、これまでほとんど聞く機会のなかった先生の若かりし時代のお話を中心となりました。特に、都立大学における卒業論文研究で電子顕微鏡を用いた微生物観察に没頭され、研究者を目指すきっかけとなったお話、学位取得後、就職先がなかなか

見つからず苦労されたこと、デラウェア大学でのカーチマン博士との出会いが、先生のその後の研究生活に大きな影響を与えたお話など、どれもがとても印象深いものばかりで、本当に素晴らしい最終講義でした。先生がお話された時代と現代とでは、研究者をとりまく環境は大きく異なるものの、真理の探究に対する情熱、研究成果を後世に伝え残す大切さ等、研究者にとって大事な素養は不変であることを改めて教えられた時間でした。最後になりますが、永田先生の今後の益々のご活躍とご発展をお祈りいたします。(海洋化学部門 小川 浩史)

▼永田 俊 教授
最終講義「海の水質循環と微生物過程」
<https://youtu.be/nCFIX1Ae0TY>



附属国際・地域連携研究センター 国際連携研究部門 教授 道田 豊

2000年4月、海上保安庁水路部から東京大学海洋研究所（いずれも当時）に国家公務員としての出向辞令を受けて異動して以来24年、大槌の国際沿岸海洋研究センターに勤務した2年7か月間を除き、その大半を海洋科学国際共同研究センター、国際連携研究センター（以下、国際センター）で過ごしました。水路部には16年間勤めましたので、キャリアの5分の3の期間、当研究所の教員だったことになります。

水路部勤務時代の1994年、「東大海洋研にIOC（ユネスコ政府間海洋学委員会）とODP（深海掘削計画）を進めるための組織が新設されたい」と聞き、組織・定員要求の大変さを知る行政官の一人として、大きな驚きを持って受け止めた記憶があります。その時は全く想定していませんでしたが、数年後にタイミングその他いろいろな条件が重なった結果、自身がその一員となりました。着任時に当時の平啓介所長から、「道田さんにはIOCをやってもらいますから。誰かちゃんと対応しなくてはならない案件、しかし

誰でもできるというものでもない。行政官の経験を生かしてしっかりやってください」と訓示を受けたことをはっきりと覚えています。

2011年の第26回IOC総会で、これまた多くの条件が重なり合った結果、IOC副議長の一人に選出されました。平先生にはたいへん喜んでいただきました。添付の写真は、2013年11月にバンコクで開催された海洋観測研究強化のための会議で平先生とご一緒した時のものです。IOC副議長としてスピーチ等した私に対して、平先生は「国際センターを作ったことが実を結んだ。一層がんばってください」と激励の言葉をかけて下さいました。2023年の第32回IOC総会で議長に選出されましたが、そのことを直接平先生にご報告することができず、残念に思います。

24年間、自身の研究のほか、IOCとそれに関連する国際連携活動に多くのエフォートを割いてきました。不十分な点多々あるとはいえ、大気海洋研究所およびわが国のこの分野におけるプレゼンスの向上にそれなりに貢献できただろうと思っています。続く皆様には、こ

の面で一層の発展をご期待申し上げます。

ここまで多くの皆様に支えられて定年退職を迎えることができました。長年のご指導、ご支援に御礼申し上げます。とりわけ、国際会議や観測で不在にすることが多かった私をしっかり支えていただいた、歴代の研究室補佐員の方々に深く感謝します。



2013年11月、バンコクにおいて開催されたインド洋・太平洋海域の海洋観測研究を推進するための会議で。前列着席者右から2人目が平啓介先生。ユネスコIOC西太平洋小委員会（WESTPAC）のリーダーたちと。



同会議において、IOC副議長の立場で挨拶。

道田 豊 教授 最終講義



最終講義の様子

道田豊教授の最終講義「海洋科学の学際、業際、そして国際」が、2024年3月26日に行われました。広島での少年時代から、東京大学での学生生活、海上保安庁における研究や国際畑での業務、そして、海洋研究所・大気海洋研究所における活動を、様々なエピソードを交えながら順を追って説明していただきました。この中で、日航機墜落事故の際の海上漂着物落下地点予測、海洋プラスチックゴミ、漂着物学会といった、道田先生のご専門の海の流れとそれが運ぶ様々な“もの”に関する研究が紹介されました。講義を拝聴し、道田先生が、国内の様々な委員会およびユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）をはじめとする国際活動を通じ、海に関わる多くの人と機関を結びつけてきたこと、そして海洋科学による社会問題解決に果たしてきた大きな役割を改めて実感いたしました。

道田先生は2024年3月末で東京大学を退職されましたが、4月からは、東京大学が設けた新しい役職である総長特使（「国連海洋科学の10年」担当）に就任されました。また、IOC議長、大気海洋研究所特任教授ほか多くの役職を務めており、忙しい毎日が続くことと思います。最終講義を終えた後でもなかなかゆっくりする時間が取れないかとは思いますが、今後とも日本と世界の研究者・研究機関を結びつけながら、大気海洋研究所の活動をサポートしていただくようお願いいたします。

（国際連携研究部門 齊藤 宏明）

▼道田 豊 教授 最終講義
「海洋科学の学際、業際、そして国際」
<https://youtu.be/LYhDpRfqDaU>



気候システム研究系 気候変動現象研究部門 教授 高菽 緑

2000年7月に気候システム研究センターの助教授として着任してから24年弱、2024年3月末に大気海洋研究所から無事卒業いたしました。これまでお世話になりました大勢の皆様のご助力に心より御礼申し上げます。

気候システム研究センターは2005年3月、駒場第2キャンパス中庭前から柏キャンパスに引っ越しました。プレハブを建て増した小さな建物から6階建ての総合研究棟への移転当初は人口密度減の寂しさもありましたが、十分なセミナー室も確保できて研究活動に余裕ができました。私は引っ越し隊長として、引っ越し隊監督や新しいセンター各室の什器選定などに奔走しました。スタッフの皆さんや学生の協力は大きく、自分にも体力があったなあと思います。

5年後、2010年には中野の海洋研究所が柏に移転し、大気海洋研究所として統合発足しました。移転1-2年前から統合チーム会合に参加しました。統合に前向きな方も、しぶしぶの雰囲気を出す方もおられ、大気海洋にするか海洋大気にするかといっ

た、いかにもありそうな議論や駆け引きも、私はチームで若輩なのをよいことに、はらはらと面白く拝見しておりました。ともあれ無事、西田所長の下、大気海洋研究所が発足して大きな研究所となり、海洋研究と気候研究が連携したメリットも年々向上してよい感じになってきたと思っています。

研究関連では、NASAが資金不足のため日米共同の熱帯降雨観測衛星TRMMの2005年での運用終了を提案し、2004年JAXAもやむなく同意した出来事がありました。1997年打ち上げの世界初降雨レーダー搭載衛星は2001年に寿命延長のための高度変更を行い、順調に成果を出し続けていたところでした。これには日米の科学者が猛反対し、関連学会、政治家への働きかけ、互いの国の議員への要望書など、私達も思いつく限りの活動をしました。結局、2005年ハリケーンカトリナ等大型台風の猛威が運用継続の決定打となり、TRMMは2015年4月まで17年に亘り気象・気候にとって重要なデータを収集し、全球降水観測衛星GPMへ

とバトンタッチできました。

2019-2022年度の4年間は河村所長の下、気候システム研究系系長・副所長として所長室に入りました。折しも新型コロナウイルスとの闘いは神経を使うものでしたが、所長室や事務室的的確な対応は大変勉強になりました。

24年間、学生や学内外の研究者の皆さんと、マルチスケールに絡み合った自然の不思議のひとつひとつをデータから紐解いていく毎日はとても恵まれたものでした。改めてお世話になった皆様に感謝申し上げます。立ち止まって考える余裕のない日々でしたが、今やっと身の回りの整理をしながら反省し、残りの人生何をしようかと考えています。



大気海洋研究所発足時の教授会写真です。

高菽 緑 教授 最終講義



最終講義の様子

高菽緑先生の最終講義「雨と雲と空と海：データから掘り出す現象理解」が、大気海洋研究所講堂において2024年3月26日に行われました。当日は、ご家族のほか、研究室の卒業生、大学・学会・省庁・研究所・プロジェクトの関係者など、先生と緑の深い方々が数多く聴講されました。講義では、先生の学生時代やご家族とのこぼれ話を交えながら、気象学を志した当時の時代背景に根ざして、どのようにご興味と情熱を膨らませながら研究を発展させてきたかが紹介されました。先生が43年間の研究生活で積み上げてきた数々の先駆的な貢献を、序盤：「熱帯気象に関する発見的研究」、中盤：「TRMM, GPMレーダ観測を用いた降水に伴う潜熱加熱の推定」、終盤：「極端降水をもた

らす環境についての常識をリニューアル」に大きく括って解説していただきました。なかでも、対流結合赤道波についての大発見をした際にプリンターからゆっくりと出てくる図に「ドキッとした」エピソードは、研究者としての生きがいとは何かを改めて教えてくださるものでした。高菽先生の益々のご活躍とドキドキワクワクに満ちた時間を心よりお祈りすると共に、今後も私たちを見守り、笑って励ましてくださるようお願いいたします。

(気候モデリング研究部門 宮川 知己)

▼高菽 緑 教授 最終講義
「雨と雲と空と海：データから掘り出す現象理解」
<https://youtu.be/4I50rLWIWx8>



海洋生命システム研究系 海洋生態系科学部門 教授 津田 敦

皆様、お世話になりました。35年間の教員、研究者生活を大過なく送ることが出来たのは、浮遊生物グループ、大海研の皆様ののおかげです。心より感謝申し上げます。

振り返ってみると、プランクトンを研究の対象としたのは、ほぼ偶然ですが、海洋と生物を研究したいというのは、ずいぶん前から思っていたことで、幸運にしてそれを全うすることが出来ました。東大の門を叩いたのは、北大の4年生だった春に、海洋研の助手だった石丸隆さんと古谷研さんが函館に来訪し、その時、古谷さんから受験しないかと誘われたことがきっかけです。願書をお願いに行った本郷の建物は威厳に満ち少しかび臭く、自分が来るところではないと感じましたが、中野区南台にあった海洋研究所は、昭和の安普請で、ここならやっていけるかもしれないと妙に安心した覚えがあります。まさかこんなに長くお世話になるとは。

大学院以降は、船に乗って観測をする醍醐味に魅了され、年間50日くらいは乗船していたのではないかと思います。ラボ系、フィールド系という分け方がありますが、ラボ系は失敗にめげない強い心や粘り強さが必要

され、フィールド系は体力と集中力です。同じ海には2度と行けません。緯度経度は同じでも、年変動、季節の推移や天候など、昨日と今日でも何か違います。だから、その時の海を理解するためには、より多くのパラメータを取得する必要があります。こうなってくると、個人としては寝る暇を惜しみ観測や分析を行います、それも限界があり、多くの人と協力することになります。寝食を共にする仲間が増えていくことも乗船の大きな楽しみです。助手になると、研究に加えて船との折衝も担当しますので、寝る時間はより制限されます。一度記録を付けてみたところ、2か月の航海で平均4時間程度の睡眠でした。今で言うブラックです。でも、観測がひと段落ついたひと時を夕陽を眺めながら仲間と歓談したり寄港地ではじけたりするの

はかけがえない時間でした。

最後の10年近くは、管理職として海から離れてしまいましたが、乗船を通して得た経験やネットワークは、多くの局面で力を与えてくれました。最終講義でも、ご披露しましたが、最後に2つの引用を加えます。

チャールズ・ダーウィンの『ビーグル号航海記』からは「旅は、希望を捨てない忍耐力、身勝手の克服、自分の力で行動する習慣、そしてなんにでも全力をつくすことを、教えてくれるはずだ」。池澤夏樹『クジラが見る夢』からは「自然を相手に何かをしようとして、条件が良ければ素直に喜び、条件が悪ければそれを克服することを喜ぶ。本当にひどいことになれば黙って耐えるのであろう」。皆さん、パソコンを閉じて外に出ましょう！船に乗りましょう！



中野区南台にあった海洋研究所全景



研究船「淡青丸」とのお別れ

津田 敦 教授 最終講義



最終講義の様子

津田敦先生の最終講義「ことばの海」が2024年3月26日に大気海洋研究所講堂で行われました。当日は、研究室の卒業生に加え、プロジェクトや学会で活動を共にした方々が全国から聴講に來られました。一体どのような講義をされるのか、タイトルからは事前に想像できなかったのですが、蓋を開けてみると津田先生らしい非常に含蓄に富んだ内容で、これまでの研究人生において先生が出会った人とその人に纏わる「ことば」を振り返ったお話でした。大学院生から始まり、本学の理事・副学長に至るまでに経験されたエピソードとそれに纏わる「ことば」が時系列に沿って綴られており、聴講されていた方々の年齢や立場は様々だったと思いますが、いずれの人にも何かしら胸に刺さる、

あるいは我が身を振り返る機会となる「ことば」があったのではないのでしょうか。また、意表をついてTシャツにジャケット姿で登壇され、ときに面白く、ときにシリアスな語り口で聴衆を惹きつける姿はさすがの一言でした。津田先生は現在も理事・副学長の仕事を続けられており、多忙を極める日々を送られています。津田先生のご健勝を心からお祈りするとともに、引き続き私たちをご指導くださいますようお願い申し上げます。

(海洋生態系科学部門 西部 裕一郎)

▼津田 敦 教授 最終講義「ことばの海」
<https://youtu.be/mYdJfZ5LFMU>



第16回 東京大学 大気海洋研究所 博士論文公開発表会

2024年2月16日(金)午後2時より2階講堂とオンラインでのハイブリッド形式で「博士論文公開発表会」が開催されました。今回は13名(理学系8名、農学生命2名、新領域2名、総合文化1名)の方が研究発表を行いました。出席した教員35名による採点の結果、最も高い評価を得た福田 彩華さん(論文題目:メダカ脳下垂体の黒色素胞刺激ホルモン産生細胞が示す光応答性に関する生理学的研究)が所長賞に選ばれました。発表会終了後には、4年ぶりに対面で博士・修士卒業のお祝い会も開催されました。なお、修士・博士修了者の方々には、研究所よりロゴマーク入りステンレスボトルが、加えて博士修了の方には名刺入れが贈呈されました。修了生の皆さんの今後の活躍を期待しています!

(教育委員会 鈴木 健太郎)

所長賞 受賞コメント

大学院理学系研究科 生物科学専攻 福田 彩華

この度は、所長賞をいただく事ができて誠に光栄です。無事に博士論文となるまで結果をまとめて執筆する事ができたのも、修士課程から博士課程までの5年間指導してくださった神田先生をはじめ、いつも貴重なコメントをくださった兵藤先生、日々活発な議論をしてくださった生理学グループの皆様のおかげです。私は水生生物の研究をおこなってききましたが、AORIでは多様な研究がおこなわれ、所内の年間のイベントを通して他の分野の研究者と交流することで、普段思いつかないような視点の発想や意見をいただくこともでき、楽しく過ごすことができました。発表では、専門分野が異なる研究者の方々にも、研究を通して感じた私のワクワク感が伝わっていたら、これ以上嬉しいことはございません。この賞をいただ



たことを励みにして、今後も精進してまいります。これまでお世話になった多くの方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



植松光夫名誉教授が The Oceanography Society Fellowに選出されました

植松 光夫 名誉教授(現・埼玉県環境科学国際センター 総長)がThe Oceanography Society(TOS)のFellowに選出されました。

なお、2024年2月21日に、ルイジアナ州ニューオーリンズで開催された海洋科学会議でのTOS Honors Breakfastにて、表彰式がおこなわれました。

■ EurekAlert! NEWS RELEASE 6-FEB-2024 - Mitsuo Uematsu selected as Fellow of The Oceanography Society
<https://www.eurekalert.org/news-releases/1033639>



選出理由:

For pioneering research on long-range atmospheric transport of Asian dust across the Pacific Ocean and its impact on marine biogeochemistry



左から、スクリプス海洋学研究所のMargaret Leinen所長、Deborah Bronk会長、植松 名誉教授

ベルゲン大学数学自然科学部と国際交流協定を締結

2024年3月7日、本所において、大気海洋研究所とベルゲン大学数学自然科学部の国際交流協定の調印式が行われました。ノルウェー側からは、駐日ノルウェー大使館科学技術・高等教育担当参事官Marianne Støren Berg氏、ベルゲン大学Thomas Spengler教授(先方幹事教員)、および同日に開催されたワークショップの参加者5名が出席しました。協定文書署名に先立ちBerg氏から、駐日ノルウェー大使およびBerg氏ご自身による祝辞をいただきました。先方の署名者であるGunn Mangerud学部長は残念ながら欠席のため、Mangerud氏署名済み文書に兵藤所長が署名し、Mangerud氏からいただいた

ビデオメッセージをその場で流しました。日本側からは所長の他に、交流担当教員である齊藤教授、幹事教員である羽角教授、および同日のワークショップ参加者である吉森准教授が出席しました。

本協定は新規締結ですが、実質的には、2015年にベルゲン大学ビヤークネス気候研究センターとの間で締結した協定を、相手方の規模を大きくして更新するものです。ビヤークネス気候研究センターは北欧最大規模の気候研究機関であり、交流協定の締結以来、合同ワークショップを日本とノルウェーの双方で年1回程度のペースで開催することに加え、個別に若手研究者の短期・長期滞在を

実施するなど、気候分野における研究交流を活発に実施してきました。ベルゲン大学数学自然科学部には海洋観測や海洋生物学に携わる研究者も数多く在籍しており、今後はより広い分野における研究交流が期待されます。(羽角 博康)



左:ベルゲン大学Thomas Spengler教授、右:兵藤所長

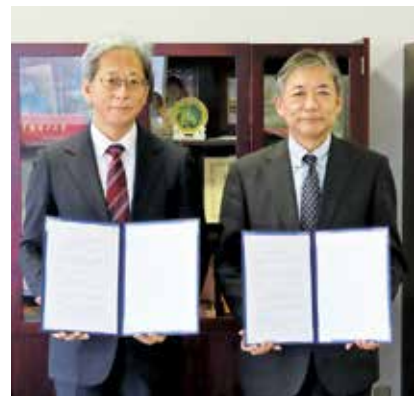
金沢大学環日本海域環境研究センターと 部局間交流協定を締結しました

日本沿岸における大気海洋科学の発展のため、金沢大学環日本海域環境研究センター（以下、環日センター）の長尾誠也センター長とは2023年から部局間交流の促進を目指してきました。その最初の取り組みとして、2023年6月18日に開催された環日センター主催の市民講演会を大海研が後援するなど、連携強化に向け活動を進めてまいりました。そのような中、2024年の元旦に、能登半島沖から佐渡島沖にかけて伸びる活断層を震源とした令和6年能登半島地震が発生しました。能登町にある環日センターの臨海実験施設も大きな被害を受け、何よりも能登半島の住民の方々の悲しみとご苦労は察するに余りあります。この地震発生域の科学的調査のため、白鳳丸による3回の緊急研究航海も実施されました。さらに、東日本大震災を経験した大海研だからこそ、今すぐに協力でき

ることがあるのではないかと考え、2024年3月15日、金沢大学において部局間交流協定を締結し、研究・人的交流、人材育成、共同利用の推進など、大気海洋科学の発展に向けて連携を強化していくことを確認しました。

2024年6月14日には金沢大学においてキックオフシンポジウムを開催しました。今後も、朴准教授・山口准教授をはじめとするメンバーが能登半島地震の震源調査を進める予定です。さまざまな分野で共同研究が今後、より活発化されるものと期待しています。文部科学省の学際領域展開ハブ形成プログラムにも大海研が申請機関、環日センターが参画機関として申請を行なっています。また、海と希望の学校の取り組みを、今後能登半島に展開することにも大きな意義があると考えています。環日センターでは、新潟大学の佐渡自然共生科学センターや島根大学の隠岐臨海

実験所など日本海の研究機関と密な連携をされており、今後より広範囲の学術交流につながることも期待しています。（兵藤 晋）



2024年3月15日、金沢大学環日本海域環境研究センターにて
右：長尾誠也 金沢大学環日本海域環境研究センター長
左：兵藤所長

安田一郎教授、渡部雅浩教授が令和6年度 「科学技術分野の文部科学大臣表彰」で顕彰されました

海洋物理学部門の安田 一郎 教授、気候変動現象研究部門の渡部 雅浩 教授が、令和6年度「科学技術分野の文部科学大臣表彰」で顕彰されました。

なお、2024年4月17日に文部科学省講堂にて、表彰式がおこなわれました。

安田 一郎 教授 科学技術賞（研究部門）
業績名：

太平洋の海水混合と生態系や気候の長周

期変動に関する研究

（推薦機関：国立大学法人東京大学）

渡部 雅浩 教授 科学技術賞（研究部門）

業績名：

数値モデリングによる気候変動および温暖化のメカニズム研究

（推薦機関：公益社団法人日本気象学会）



■ 文部科学省 - 令和6年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者等を決定しました
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_01364.html



表彰式会場にて。左から渡部教授、安田教授

杉本隆成名誉教授が瑞宝中綬章を受章

杉本隆成 名誉教授が、令和6年春の叙勲において、瑞宝中綬章を受章されました。

杉本先生は、日本近海の黒潮前線波動や黒潮主流から派生する暖水塊、津軽暖水渦などの中規模現象の力学的機構、およびその生物生産に果たす役割に関する研究を展開され、とくに、回転水槽を用いたメキシコ湾のループ流と暖水塊の発生機構に関する研究は海外でも高く評価されています。また、レジームシフトに代表される数十年スケールの海洋気候変動が海洋生態系に及ぼす影響を従来の統計手法や数値実験だけでなく、無酸素底泥層のボーリング調査で得られた試料を分析し、数百年間にわたり継続する現象として明らかにしました。この間、GLOBEC

(Global Ocean Ecosystems Dynamics)の運営委員として日本GLOBECの立ち上げに貢献されたほか、PICES (North Pacific Marine Science Organization)の科学委員会委員としてアジアおよび北太平洋周辺国の海洋科学の啓発に貢献してきました。さらに、水産海洋学会会長として研究を力強く牽引するだけでなく、カナダのT.R.Parsons教授と共同で刊行を開始した同学会の国際誌であるFisheries Oceanographyは、日本の水産海洋研究を国際的に強くアピールすると同時に、その研究の国際的な発展に大きく寄与したといえます。

杉本隆成名誉教授の長年の教育ならびに研究の卓越したご功労が認められ、本章

を受章されたことを心よりお祝いいたします。
（海洋生物資源部門 木村 伸吾）



ハワイ大学マノア校との全学協定締結

2024年6月20日、東京大学はハワイ州立ハワイ大学マノア校と全学協定(MOU)を締結しました。

大気海洋研究所では、ハワイ大学マノア校の海洋地球科学技術学部(SOEST)とこれまで4回のジョイントシンポジウムを開催して密な学術連携をはかり、多くの共同研究が進められてきました。2025年10月には第5回目のジョイントシンポジウムを柏キャンパスで開催することを計画しており、新たな共同研究が多数生まれ、環太平洋学術連携のさらなる発展につながることを期待しています。

(兵藤 晋)



2024年6月20日、ハワイ大学マノア校にて
左からMichael S. Brunoハワイ大学副総長、兵藤所長



双方のグッズを交換。
大海研からは研究船「白鳳丸」Tシャツを贈呈

高数 縁名誉教授が「第17回海洋立国推進功労者表彰」(内閣総理大臣賞)を受賞

高数 縁名誉教授が「第17回海洋立国推進功労者表彰」(内閣総理大臣賞)を受賞し、2024年7月15日に表彰式が行われました。

「海洋に関する顕著な功績」分野「海洋に関する科学技術振興」部門
功績概要：地球衛星観測による気候現象理解への貢献

■ 国土交通省 - 第17回海洋立国推進功労者内閣総理大臣表彰について
https://www.mlit.go.jp/report/press/kaiji01_hh_000572.html



2024年7月15日に行われた表彰式にて

訃報

寺本先生、瀬川先生、浅井先生、徳山先生の訃報につきまして、ここに謹んでお知らせいたします。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

寺本 俊彦 名誉教授(海洋物理)におかれましては、令和5年12月1日にご逝去されました。(享年97歳)

瀬川 爾朗 名誉教授(海底物理)におかれましては、令和6年10月6日にご逝去されました。(享年88歳)

浅井 富雄 名誉教授(海洋気象)におかれましては、令和6年11月30日にご逝去されました。(享年92歳)
浅井先生は、1990.4.2～1993.3.31に旧 海洋研究所所長も務められました。

徳山 英一 名誉教授(海洋底地質学)におかれましては、令和7年1月13日にご逝去されました。(享年77歳)

「大気海洋研究所うみそら基金」ご支援のお願い

お知らせ

サンマやイカの減少、見たことのないゲリラ豪雨、毎年更新される最高気温…。我々の住む地球は、これまでの人間活動によって急激に変化しています。これらの問題に科学的に立ち向かうため、世界中の研究者が知恵をあわせて、大気と海洋、その相互作用を研究しています。

地球と人類の持続可能性に向けて、現在海や生物がどうなっているのか、今後どうなってしまうのか、これから私たちは何をすべきなのか、を明らかにするのが、大気海洋科学の使命です。この使命をはたすためには、科学イノベーションを生み出し、問題解決を担う若い世代が育つような、世界レベルの研究環境を維持しなければなりません。

地球上のすべての生き物にとって大切な、かけがえのない「うみ」と「そら」を守り継ぐため、このたび「うみそら基金」を立ち上げました。私たちの研究教育活動の仲間になっていただければませんか?

(大気海洋研究所 所長 兵藤 晋)

詳しくは、以下のページをご覧ください。

■ 大気海洋研究所うみそら基金
<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt188>



モラトリアム期間

吉澤 晋 海洋生態系科学部門(大学院新領域創成科学研究科)准教授

「脳」を取り出して、洗いたい。私が10代の頃によく思っていたことだ。要は、頭、身体、そして外の世界がどうにも正しくリンクしていると思えない、そんなもどかしい感覚だった。このような時、私は「生きている実感が無い」と感じていた。頭の中の曖昧な情報を、身体性を使って具現化する「絵を描く」という行為が好きだったのは、おそらく生きている実感がそれなりに得られたからだと思う。16歳からは絵を描くことに加え、ギターを担いで道端(京都木屋町)で歌うという、分かりやすく外の世界と接する活動も始め、毎週末、街に繰り出し酔っ払いの前で歌を歌っていた。高校卒業後は、24時間絵のことに集中したら、どれだけ絵が上達するのだろうか?を実践する生活をした。それなりに生きている実感があった。大学には行った方が良く、と諸先輩方に勧められたこともあり、センター試験前の数日は過去問を勉強し、センター試験のみで受験できる大学を選び

進学した。ただ、すぐに休学し、再び絵を描く生活に戻った。休学も1年が過ぎた頃、絵画の恩師にアメリカのアートスクールのお手伝いを頼まれ、コロラド州のボルダーに滞在することになった。最低限の英語は話せるようにと、コロラド州立大学ボルダー校の英語コースに通うことになり、コロラド大学の学生寮で生活することになった。異国の地で、言葉の通じない環境での2人1部屋の寮生活。見るもの、聞くことの全てが新鮮で、実感があるのだ、ないだのを悩む余裕がないくらい、日々の生活に追われていた。そんな生活を続けるうちに、生きている実感が沸々と湧き、もっと学びたい!と強く思うようになり、帰国し大学に通い始めた。その後、大学の講義で光る海洋細菌に出会い、心を奪われ、この細菌のことを深く知るために博士課程へと進学した。研究に必要な学びは身体性を伴ったことから、生きている実感を日々感じながら現在は研究活動を行えている。

ちなみに、高校時代は受験勉強もそれなりに頑張っていたので、絵を描く生活をしていても大学に進学することができたのだと思う。また大学生生活前に十分なモラトリアム期間を過ごせたことで、進学後は学問に対して真摯に向き合えたのだと感じている。モラトリアム期間を支えてくれた家族を含む関係者への感謝は、年々増すばかりである。



ボルダー近くの山での様子(1998年頃)。ボルダーはマラソンの高地トレーニング地(標高1,655m)として有名なだけでなく、LOHAS(lifestyles of health and sustainability)という言葉が生まれた場所でもある。



第14回

日本沈没

小松 左京(著)
文庫判・416ページ(上)416ページ(下)・各600円(税抜)
2020年4月・KADOKAWA
ISBN: 978-4-04-109118-0(上)978-4-04-109119-7(下)

小説を毎日少しずつ読み進んでいくと、現実と小説世界が交錯し既視感よりずっと現実味を持つことがある。小松左京の『日本沈没』は、その作用が非常に強い小説であった。もちろん、この小説以降に我々は1995年の阪神淡路大震災、2011年の東日本大震災を経験し、我々が映像を通して見た現実が、1973年に書かれた小説の中にあったということもある。阪神淡路は、戦後最大の災害と言われ、戦争を知らない私にとっては生涯で経験する最も甚大な災害と当時は感じたが、16年後にさらに大きな震災を経験することになったのは言うまでもないことである。2024年の正月には能登地方で大きな地震があり、小説世界と現実世界は境界線をあいまいにした。やはり日本という国、地震や噴火など自然災害の多い国である。数十年周期で繰り返される大型地震の震源地は釧路沖、東北沖など複数あり、どの時代の読者にとっても、『日本沈没』で描写される悲劇はそれほど絵空事ではない。

プレートテクトニクスの始まりである大陸移動説は、ドイツ人ウエグナー博士によって20世紀初めに唱えられたが、プレートテクトニクスとして成熟し広く認められるようになったのは1960年代である。それを考えると1973年にこの小説が書かれたことは、小松が最先端の地球科学にアンテナを張り構想を練っていたことが伺える。地球規模のプレートや大陸のダイナミズムを目の当たりにすると、ちっぽけな日本が沈没することは今でもあり得そうな気がしてくる。東京大学地震研究所の先生に聞くと、日本が沈没することはあり得ないと言ってもらえるのだが、この小説が時代を経て、沈没のメカニズムを変えながらドラマ化、映画化が繰り返されるのは、繰り返される地震や噴火に対する不安を我々がいつも抱えているからかもしれない。

物語は、潜水調査艇のパイロットである小野寺を中心に語られる。民間

のパイロットであった小野寺は、海底での異変を目にしたことをきっかけに、日本周辺に起こる大規模な地殻変動を調査し、国民の海外脱出を計画する政府の極秘プロジェクト(D計画)に参加することとなる。大きな役割を担うのは、日本沈没をいち早く察知し警告を発する学会の異端児、田所博士であり、政財界の陰のフィクサーである渡老人である。最新のドラマでは渡老人は登場せず、意思決定の先頭に立つのは等身大の総理であり各省庁の役人である。物語は最後まで、科学的な裏付けのある一流のSFであるが、最も大きなテーマは国家である。国土を失った国家とは、日本民族とはといったことが大きなテーマであり、沈没以降を描く予定だった第2部へ引き継がれていく。第2部は小松一人では書くことはできず、この話題は周囲では触れてはならない話題だったと聞く。D計画の結果、7500万人を救出し、国土を失った7500万人の物語を書くことは難しかったのだろう。小松は、阪神淡路大震災の時には多くのコメントを残しているが、東日本大震災時には沈黙を保った。小松は2つの震災に何を想ったのだろう。

余談になるが、草薙剛さんが小野寺を演じた2006年の映画化では、スタッフが中野区にあった海洋研究所にきた。確か木暮一啓先生(現 名誉教授)のところにきたのだが、木暮先生の部屋がスタッフの期待より整頓されすぎていたらしく、より汚れていて顕微鏡がある部屋ということで(何で地球物理学者の研究室に顕微鏡があるべきと考えたのかは謎である)、私の部屋が紹介された。大変名誉なことである。スタッフは写真を撮りまくり、本棚に並んでいる本を眺めて、田所博士の書棚に並んでいるべき本とかは何かと問うので、筒井康隆の『日本以外全部沈没』と答えたところ、スタッフの視線は宙をさまよった。田所博士の書棚に『日本以外全部沈没』があったらおしゃれだったと思いますかね。(津田 敦)

空と海の文学

一般公開2024開催

2024年10月25日(金)・26日(土)に東京大学柏キャンパス一般公開2024「柏でみつける科学の明日」が開催されました。大気海洋研究所でも部門展示やデジタルクイズラリー、体験プログラム、バルーンアート、研究船上からのライブ中継など様々な企画を実施しました。

- 1 階会場の様子。大海研には2日間で約6,500名の方にご来場いただきました
- 今回のバルーンアートは深海がテーマ。メンダコ(左)とチョウチンアンコウ
- 2019年以来となる深海魚展示にはたくさんの深海魚ファンが
- 触腕の動きを再現できるアオリイカをつくってお魚をゲット
- 気候システム研究系企画。正二十面体地球儀づくりに挑戦
- 女子中高生向け理系進路選択支援イベントとの合同企画。インド洋上の「白鳳丸」からライブ配信



海と希望の学園祭 in Kamaishi



「白鳳丸」のバルーンアート。
海上保安庁のマスコット「うみまる」と



トークイベント：人と海をつなぐ「船」。大海研からは
原田尚美教授、岡英太郎教授が登壇



■ 釜石市 -「海と希望の学園祭 in Kamaishi」プログラム
https://www.city.kamaishi.iwate.jp/docs/2024110800013/file_contents/1.pdf

2024年11月9日(土)、10日(日)に岩手県釜石市にて「海のことを学び楽しめる特別な2日間」と銘打ち、釜石市主催イベント「海と希望の学園祭 in Kamaishi」が開催されました。本学からは大海研以外にも社会科学研究所、生産技術研究所、先端科学技術研究センターが共催団体として参加しました。

AORI卓球大会開催

今年度のAORI卓球大会は、2024年11月18日(月)～12月5日(木)の昼休み12:00～13:00と夕方17:30～に、大海研1階エントランスホールにて開催されました。熱い闘いの結果は以下の通りです。

- 優勝：海洋底科学部門
- 準優勝：海洋物理学部門
- 3位：気候システム研究系

AORI写真コンテスト2024受賞作品決まる

毎年恒例の「AORI写真コンテスト」が2024年も実施され、応募作品65点の中から大海研メンバーの投票により以下の作品が受賞しました。



大気海洋研究所部門1等賞「星影のキャンパス」
(海洋物理学部門 山本 晃立)



大気海洋研究所部門2等賞「大海研の冬將軍」
(海洋生物資源部門 須田 大朔)



生き物部門1等賞
「僕が釣った魚なんです。。。」
(海洋生命科学部門 神田 真司)



生き物部門2等賞
「きびだんご探し@柏の葉キャンパス」
(海洋生物資源部門 戸田 達也)



人間部門1等賞
「海の研究者」
(海洋生物資源部門 林 沅)



人間部門2等賞
「この二の腕はフィクションです」
(海洋生命科学部門 阪井 紀乃)



海・空部門1等賞「飽きない大楢の空」
(海洋生命科学部門 呂 律)



海・空部門2等賞
「去りゆく紫金山・アトラス彗星」
(気候モデリング研究部門 山田杏璃)



その他(自由)部門1等賞および所長賞
「x軸y軸z軸」
(海洋生物資源部門 須田 大朔)



その他(自由)部門2等賞
「サーモグラフィーに宿るAORIの気配」
(気候モデリング研究部門 山田 杏璃)



音楽祭と忘年会の開催

2024年12月20日(金)に音楽祭と忘年会が開催されました。忘年会第一部として夕方から大海研2階講堂にて、音楽サークルや有志の出演による「AORI音楽祭2024」が開かれました。

- ① 和楽器アンサンブル
- ② ハンドベル演奏に聴き入る聴衆

第二部は1階エントランスホールにてメインの忘年会。写真コンテストや卓球大会の表彰も行われました。

- ③ 写真コンテスト所長賞発表
- ④ 卓球大会優勝チームの勇姿

能登の海底で何が起こったのか？ 学術研究船「白鳳丸」による緊急調査航海でわかったこと

2024年12月21日(土)にSHIBUYA QWS(渋谷キューズ)スクランブルホールにて、令和6年能登半島地震直後に実施された第一次～第三次緊急調査航海の調査報告イベントを開催しました。当日の詳しい内容は「学内広報」記事にてご覧ください。



■「学内広報」NO.1590(2025.1.27)特集：能登の海底で何が起こったのか？
https://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1590/02features.html#features_2



民間企業、公的機関、研究機関や報道関係者に加え、高校生、小学生まで幅広い分野・世代からの参加がありました



パネルディスカッションでは小学生、高校生の参加者から鋭い質問が寄せられました

著者による 新刊紹介



貝輪の考古学

日本列島先史時代におけるオオツツノハ製貝輪の研究

忍澤 成視(著)
B5判・384ページ・12,000円(税別)
2024年3月・新泉社 刊
ISBN : 978-4-7877-2305-5



貝殻の魅力は、何といってもそのかたち、色、艶、質感にあり、古来より多くの人々を魅了してきた。本書は、装身具などの素材となった「貝」、とくにオオツツノハに着目し、先史時代の人々と貝との関わりについて、考古学的な資料と生物学的なデータから論じた。とくに、縄文時代から古墳時代まで続く「日本列島最長の威信財」とされるオオツツノハ製貝輪の謎を解明するため、列島各所の島嶼部を20年以上にわたって単独調査し、生物としてのオオツツノハの分布や生態等についても詳細に記録・分析した本邦初のもの。令和5年7月、早稲田大学にて博士(文学)学位を取得した論文の書籍化。装身具に使われた貝を調べることから、当時の習俗・社会形態・交易ルートなどさまざまな課題に挑んだ。

(海洋化学部門 忍澤 成視)

日本のウナギ 生態・文化・保全と図鑑

海部 健三(著) 脇谷 量子郎(著) 内山 りゅう(写真)
B5判・192ページ・4,500円(税別)
2024年7月・山と溪谷社 刊
ISBN : 978-4-635-06285-5



本書は日本に生息するウナギ属魚類を中心に、その生物としての進化や生態はもとより、人間との関係性の歴史や、今後の保全を考える上での重要な情報をまとめたものです。そもそも日本で分布が確認されているウナギは、稀種を入れてもたった4種であり、「図鑑」を名乗るのは少々冒険的な試みではありますが、本書の最大の魅力は魚類の生態写真の撮影をライフワークとしてきた内山りゅう氏による数々の写真にあります。これまであまり知られてこなかったウナギの生態を垣間見ることができる、これらの写真を通じ、この生き物の面白さを伝えることが、本書の大きな目的といえます。

(海洋生物資源部門 脇谷 量子郎)



気候変動と社会 —基礎から学ぶ地球温暖化問題

東京大学 気候と社会連携研究機構(編)
A5判・272ページ・2,800円(税別)
2024年7月・東京大学出版会 刊
ISBN : 978-4-13-062732-0



深刻化する地球温暖化問題の解決に向けて、私たちは何ができるだろうか？ 気候変動の原理から温暖化対策、持続可能な開発まで、平易かつ体系的に解説した本書により、私たちを取り巻く地球環境とそこで暮らす私たち人間社会の現在と未来を俯瞰的に学ぶことができる。

本書は基礎的な内容を体系的かつ平易に解説する大学初学者向けの教科書として企画された。気候変動対策や生物多様性の保全と持続可能な開発との一体性に鑑み、健康維持や食料・エネルギー・水の安定供給、生態系など地球環境保全や持続可能な開発についても体系的に学べるようにし、最新の情報を盛り込むと同時に、要素間の結びつきや考え方の解説にも重点を置いた。

(編集委員：気候変動現象研究部門 渡部 雅浩)

本当に感動する サイエンス超入門！ 空のふしぎを解き明かす 天気はなぜ変わるのか

渡部 雅浩(監修)
四六判・224ページ・1,320円(税込)
2024年11月・ニュートンプレス 刊
ISBN : 978-4-315-52862-6



近年、外出する危険な猛暑日や、人々が命を落とすほどの豪雨災害といった、はげしい天候の日が増えていきます。いったいなぜ、このような現象がおこるのでしょうか。たとえば大雨は、地球温暖化による長期の気温上昇で大気中の水蒸気が増え、その分だけ雨が降る傾向にあるため、その頻度が徐々に増えています。また、せまい範囲で起こる集中豪雨の原因は、長さ数百キロメートルになることもある積乱雲の列「線状降水帯」です。

気象の理解を深めると、これまで何気なく見ていた空や天気予報が、より興味深いものになるはずです。また災害をもたらす気象のしくみを知ることで、今後想定される災害や、とるべき防災行動について備えることができるでしょう。

本書では、私たちの生活に直結する「天気」のしくみをやさしく解説します。気象について一から学びたい方や、学び直したい方など、多くの方に気軽に読み進めていただける内容になっています。不思議と謎に満ちた「天気の世界」を、どうぞお楽しみください。

(気候変動現象研究部門 渡部 雅浩)



孫 恩愛 特任研究員

海洋物理学部門
第38回北方圏国際シンポジウム 青田昌秋賞 [2024年2月]
発表題目: Enhanced turbulent mixing associated with lee wave generation over rough topography in the Chukchi Borderland, Arctic Ocean

井村 裕紀

気候モデリング研究部門 (大学院理学系研究科) 修士課程
令和5年度 理学系研究科研究奨励賞 (修士) [2024年3月]

乙坂 重嘉 准教授

海洋化学部門
日本原子力学会JNST (Journal of Nuclear Science and Technology) Most Popular Article Award 2023 [2024年3月]
受賞論文: Distribution, dynamics, and fate of radiocesium derived from FDNPP accident in the ocean

板倉 光 助教

海洋生物資源部門
令和5年度日本水産学会 水産学奨励賞 [2024年3月]
受賞題目: ウナギ属魚類の生態解明と保全に関する研究

河合 萌

海洋生命科学部門 (大学院農学生命科学研究科) 博士課程
ISTS42 (International Sea Turtle Symposium 2024)
Archie Carr Student Award [2024年3月]
受賞題目: Foraging patterns of more nourished green sea turtles (Chelonia mydas) migrating to high latitudes in Japan

根本 夏林

海洋底科学部門 (大学院理学系研究科) 博士課程
第24回AMSシンポジウム 学生優秀ポスター発表賞 [2024年3月]
受賞題目: Meteoric ¹⁰Beを用いたティモール海におけるターミネーション1における降水量復元

板倉 光 助教 ほか

海洋生物資源部門
Wiley Top cited Article 2022-2023認定 [2024年4月]
受賞論文: Cumulative effects of low-height barriers on distributions of catadromous Japanese eels in Japan

青山 華子

海洋生命科学部門 (大学院新領域創成科学研究科) 博士課程
第24回マリンバイオテクノロジー学会大会 優秀ポスター発表賞 [2024年5月]
受賞題目: サングコに由来するペプチドの抗菌スペクトル評価と組織発現解析

前田 優樹

海洋物理学部門 (大学院理学系研究科) 修士課程
日本地球惑星科学連合・人工知能学会GeoSciAI (地球惑星科学分野データにおけるAIモデル作成コンテスト) GeoSciAI2024 学生賞 (気象課題) [2024年5月]

道田 豊 特任教授 (名誉教授)

国際連携研究部門
海洋理工学会 顕功賞 [2024年6月]

高木 悠花 准教授

海洋生態系科学部門
日本古生物学会 研究奨励賞 [2024年6月]
受賞題目: 浮遊性有孔虫の光共生に関する古生態・進化古生物学的研究

脇谷 量子郎 特任准教授

海洋生物資源部門
The Institute of Fisheries Management (IFM) 2nd International Eel Science Symposium, Best Presentation award [2024年7月]
受賞題目: Amphibious feeding mode in an Anguillid fish

中山 新 学振特別研究員

海洋生物資源部門
第26回日本進化学会神奈川大会 (SESJ2024) ポスト口頭発表賞 最優秀賞 [2024年8月]
受賞題目: 透過が「派手」を作出す：性淘汰がエゾハリカの偏光シグナルにもたらした適応

南館 健太 特任研究員

海洋底科学部門
日本第四紀学会2024年大会 若手発表賞 (口頭若手部門) [2024年8月]
受賞題目: 小笠原諸島のシンクホール堆積物が示す数百年スケールの熱帯低気圧活動の変動

高木 悠花 准教授

海洋生態系科学部門
ibidiフォトコンテスト日本大会2024 敢闘賞 [2024年9月]

堀江 尚志 ほか

海洋生命科学部門 (大学院理学系研究科) 修士課程 (研究当時)
日本動物学会2024年度 Zoological Science Award [2024年9月]
受賞論文: Segment-Dependent Gene Expression Profiling of the Cartilaginous Fish Nephron Using Laser Microdissection for Functional Characterization of Nephron at Segment Levels

柳本 大吾 助教

海洋物理学部門
日本海洋学会2024年度日高論文賞 [2024年9月]
受賞論文: Abyssal current and water mass in the Main Gap and an adjacent Small Gap of the Emperor Seamount Chain

杉野 公則

気候モデリング研究部門 (大学院理学系研究科) 博士課程
日本海洋学会2024年度奨励論文賞 [2024年9月]
受賞論文: Zinc and silicon biogeochemical decoupling in the North Pacific Ocean

高田 真子

海洋生態系科学部門 (大学院新領域創成科学研究科) 博士課程
2024 The 14th Asian Symposium of Microbial Ecology (ASME 2024) 学生優秀ポスター発表賞 [2024年9月]
受賞題目: Adaptation of Microbial Communities to Redox Environmental Changes in Subseafloor Sediments

太田 映

海洋底科学部門 (大学院理学系研究科) 博士課程
日本地質学会第131年学術大会 学生優秀発表賞 [2024年9月]
受賞題目: 北海道白糠丘陵における白亜紀-古第三紀境界のオスミウム同位体層序

小野 誠太郎

海洋底科学部門 (大学院理学系研究科) 修士課程
日本地質学会第131年学術大会 学生優秀発表賞 [2024年9月]
受賞題目: 地磁気異常データを用いたマリアナトラフの拡大過程

猿渡 敏郎 助教

海洋生物資源部門
The 29th Biennial Conference of Asian Association for Biology Education (AABE 2024) Best Presentation Award [2024年10月]
受賞題目: Creating THE fish of dreams, A program placing "life history" into perspective

内田 大賀

海洋生命科学部門 (大学院理学系研究科) 博士課程
日本共生生物学会 第8回大会 (Symbio2024) 若手発表賞 [2024年10月]
受賞題目: シャコガイ・楯虫藻共生系から見出された、水生無脊椎動物における新たな藻類利用経路の可能性

伊藤 進一 教授

海洋生物資源部門
PICES (North Pacific Marine Science Organization) The Wooster Award [2024年10月]

吉澤 晋 准教授 ほか

Microbes and Environments誌2023 Microbes and Environments論文賞 [2024年10月]
受賞論文: Light-driven Proton Pumps as a Potential Regulator for Carbon Fixation in Marine Diatoms

西野 聡

海洋生態系科学部門 (大学院新領域創成科学研究科) 博士課程
日本微生物生態学会第37回広島大会 優秀ポスター賞 [2024年10月]
受賞題目: 網羅的遺伝子機能予測解析で探る海洋細菌 SAR11系統の生態

Alexanra Bagarinao Regalado

海洋生物資源部門 (大学院農学生命科学研究科) 博士課程
PICES (North Pacific Marine Science Organization) 2024, FIS Committee Best Poster Presentation Award [2024年11月]
受賞論文: A tropical sardine in a temperate environment: understanding the biology of *Sardinella lemuru* in the northern waters of Japan

松原 花

国際連携研究部門 (大学院農学生命科学研究科) 博士課程
PICES (North Pacific Marine Science Organization) 2024, Best Poster Presentation by the Human Dimensions Committee [2024年11月]
受賞題目: Synergies between gender equality and sustainability in coastal fisheries resources use: Case studies in Japan

芦田 将成 技術専門職員

海洋調査技術学会 第36回研究成果発表会 若手優秀発表賞 [2024年11月]
受賞題目: AIによる岩石ドレッジ映像の自動解析

板倉 光 助教

海洋生物資源部門
農学会 2024年度 (第23回) 日本農学進歩賞 [2024年11月]
研究業績課題名: 森川海の生態系の繋がりに着目したウナギ属魚類の生態学的研究

竹中 浩貴

海洋生物資源部門 (大学院新領域創成科学研究科) 博士課程
2024年度水産海洋学会研究発表大会 若手優秀講演賞 [2024年11月]
受賞題目: 耳石Sr同位体比分析を用いた有明海エツの母川判別

阿部 彩子 教授

気候変動現象研究部門
地球環境史学会賞 [2024年11月]
対象研究テーマ: 大循環モデルを活用した古気候-氷床変動メカニズムの解明

青山 華子

海洋生命科学部門 (大学院新領域創成科学研究科) 博士課程
日本サンゴ礁学会 第27回大会 優秀口頭発表賞 [2024年11月]
受賞題目: サンゴ抗害ペプチドの組織発現解析から推測する病原細菌の制御戦略

前田 優樹

海洋物理学部門 (大学院理学系研究科) 修士課程
日本気象学会2024年度秋季大会 松野賞 [2024年12月]
発表題目: 深層学習を用いた北半球夏季季節内振動 (BSISO) の予測と要因分析

天野 翔次郎

国際連携研究部門 (大学院農学生命科学研究科) 修士課程
日本海洋政策学会「第16回 (2024) 学生小論文」最優秀賞 [2024年12月]
受賞題目: 日本の海洋状況把握 (MDA) の能力強化に向けた政策提言

Huang Zihan

海洋底科学部門 (大学院総合文化研究科) 博士課程
令和6年度岩手県三陸海域研究論文知事表彰 特別賞 [2025年1月]
受賞論文: 大鰐湾におけるエゾアワビによる高精度な海洋復元に関する研究

人事異動一覧 *R6.3～R7.2

*教員 (常勤・特定有期・客員)、職員 (常勤) のみ掲載

□ 教員 (常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	旧所属・職名
R6.3.31	高教 緑	退職	気候変動現象研究部門	教授
R6.3.31	永田 俊	退職	海洋化学部門	教授
R6.3.31	山崎 俊嗣	退職	海洋底科学部門	教授
R6.3.31	道田 豊	退職	附属国際・地域連携研究センター	教授
R6.3.31	平松 一彦	退職	海洋生物資源部門	准教授
R6.4.1	木村 伸吾	配置換 (転入)	海洋生物資源部門	教授
R6.4.1	高木 悠花	採用	海洋生態系科学部門	准教授
R6.4.1	横山 千恵	採用	気候変動現象研究部門	講師
R6.4.1	栗栖 美菜子	採用	海洋化学部門	講師
R6.6.1	岡 英太郎	昇任	海洋物理学部門	教授
R6.9.30	入江 貴博	退職	海洋生物資源部門	助教
R6.12.31	秋澤 紀克	退職	海洋底科学部門	助教

□ 職員 (常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	旧所属・職名
R6.3.31	中川 美和	退職	附属共同利用・共同研究推進センター	一般技術職員
R6.4.1	近藤 仁美	昇任 (転出)	柏地区共通事務センター	総務チーム 総務係長
R6.4.1	松峯 正典	配置換 (転出)	教養学部等経理課財務チーム	財務チーム 係長
R6.4.1	佐野 清幸	配置換 (転出)	医科学研究所研究支援課研究推進チーム	外部資金チーム 係長
R6.4.1	青田 晶子	配置換 (転出)	地震研究所研究支援チーム	外部資金チーム 主任
R6.4.1	萩原 聖也	配置換 (転出)	本部人事企画課 (研修出向: 文部科学省国際業務研修生)	国際・研究推進チーム 一般職員
R6.4.1	永岩 修也	配置換 (転出)	本部人事企画課人事情報マネジメントチーム	経理・調達チーム 一般職員
R6.4.1	村本 洋子	配置換 (転入)	財務チーム	柏地区共通事務センター経理チーム 上席係長
R6.4.1	浦田 雅子	配置換 (転入)	外部資金チーム	新領域創成科学研究科研究交流チーム 上席係長
R6.4.1	大平 理美	配置換 (転入)	総務チーム	物性研究所総務係 係長
R6.4.1	高木 美月	配置換 (転入)	国際・研究推進チーム	経済学研究科等総務チーム 一般職員
R6.4.1	大石 彩乃	採用	経理・調達チーム	一般職員
R6.4.1	大川 遼馬	採用	外部資金チーム	一般職員
R6.4.1	金井 秀雄	昇任	国際・研究推進チーム	国際・研究推進チーム 係長
R6.4.1	赤塚 健一	配置換 (部局内)	施設・安全管理チーム	施設・安全管理チーム 上席係長
R6.4.1	早乙女 伸枝	昇任	附属共同利用・共同研究推進センター	技術専門職員

□ 特定有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	旧所属・職名 (本務所属・職名)
R6.3.31	高須賀 大輔	退職	気候モデリング研究部門	特任助教
R6.4.1	津田 敦	兼務	海洋生態系科学部門	特任教授 兼務教授
R6.4.1	高橋 千陽	採用	気候変動現象研究部門	特任助教
R6.4.1	道田 豊	採用	附属国際・地域連携研究センター	特任教授

□ 国内客員教員

委嘱期間	氏名	所属・職名	本務先・職名
R6.4.1～R7.3.31	今田 千秋	客員教授	佐賀大学海洋エネルギー研究所 客員研究員
R6.4.1～R7.3.31	若松 宏樹	客員准教授	附属国際・地域連携研究センター 農林水産省農林水産政策研究所 主任研究官

□ 外国人客員教員

委嘱期間	氏名	所属・職名	
R6.4.1	SHEN CHUAN-CHOU	採用	海洋底科学部門 客員教授
R6.5.8	HSIEH CHIH-HAO	採用	附属国際・地域連携研究センター 客員教授
R6.9.6	HSIEH CHIH-HAO	退職	附属国際・地域連携研究センター 客員教授

